『星と月は天の穴』(4)

――不在証明としての「作品」――

榊原英城

時計・電話・車

矢添は部屋へ戻り，食事をはじめる。そして，欲情が消えていないことに気付く。

〔……〕白い皿の上に，ピンク色の薄い鮭の肉を並べたとき，食料品店で感じた欲情がまだ続いていることが分った。

ちょっとしたキッカケで，早晩はっきりした形で動き出す筈のものだった。集中できて手応えを感じている仕事をしているときには，それに伴って神経の末端が極端に鋭くなっている。その神経が一斉に性のほうへ向いてしまった。

いったんそうなると，全身に張りめぐらされている神経の網がささくれ立って，仕事が曖昧になりはじめる。ほぐす必要がある。女の軀が必要になる。〔……〕[1]

矢添が書きつつある小説については，のちに触れることとするが，彼が欲情を充たすのは「集中できて手応えを感じている仕事」が「曖昧に」ならないようにするためだと書かれていることに注意しておこう。こういった，やや言い訳めいた表現は，矢添の性格づけに度々用いられるからである。

〔……〕女の軀が必要になる。このとき，女は彼にとって全くの道具である。娼婦のところへ行くために，彼は身支度をしはじめた。[2]

女体が「道具」として必要になるとき，その「道具」とは当然のように娼婦に直結するということが，矢添にとっての他者とは何かをよく表わしている。彼の結婚生活が「一年間」[3]であったことも，そのことにかかわるのかもしれない。

時計を手首に巻きつけながら，文字盤を見る。午後三時である。六時には戻ってきて，仕事をつづけよう，と予定を立てながら，電話のダイヤルを回しはじめた。

「いつもの女を用意しておいてくれ」〔……〕

道具は，やはり使い馴れたものがよい，と彼はおもっている。[4]

年齢へのこだわりの象徴が「入歯」であれば，時間への過度の神経の集中は「時計」への言及によって繰り返される。仕事の予定として，それとなく描かれる矢添の腕時計は，彼が娼婦と会う場面での描写によって，よりはっきりとした意味を持って矢添の心理を写しだす。

旅館の一室に入って机の前にあぐらをかいていると，間もなく千枝子が姿を現わした。彼は立上り，千枝子の眼を見る。馴染んだ女なので，すぐに察して次の間へ入り，衣服を脱ぎはじめる。その部屋には，すでに布団が敷いてある。

彼は腕時計をはずし，枕もとに置く。背を跼めて靴下を脱ごうとしていた千枝子は手をとめて，そのままの姿勢で，彼を咎めた。

「その癖は直らないのね，厭な癖」[5]

「馴染んだ女」である千枝子も，矢添の時計へのこだわりを彼の「癖」というくらいに理解しているにすぎない。行為のあと，再び腕時計が描かれる。

「あたし，不感症じゃないのよ。あんたに愛情があれば，もっと違った軀になるのよ」〔……〕

千枝子は腹這いになり，枕もとの煙草の箱に腕を伸ばす。そのついでに，指先で彼の腕時計を弾き，

「こんな憎らしいものを，置いておくから，駄目なのよ」[6)]

矢添のこの「癖」は，彼が千枝子と別れたあとで，次のように説明される。

千枝子と過した時間は，情事のための時間ではない筈だ。平静な気分で仕事をつづけるのに必要とした時間だとおもっている。つまり，千枝子はそのための道具である。

しかし，一人の女を道具にしてしまうことは，なかなか困難なことだ。腕時計をはずして，寝床の枕もとに置くという動作には，かなり意識的な部分がある。女を道具とみなしているのだぞ，という意志表示が混っており，そこにはすでに無理が生じている。[7)]

矢添はあくまで仕事のための時間を無駄にしないためだと考えようとしている。女を道具とみなすのもそのためで，そこに無理があることに矢添の意識は及んでいる。つまり，時間とは矢添にとって，書くためにしか意味がないわけだ。

矢添克二が机に向うのは，一日のうちの短い時間である。そのときは別として，部屋の中にいるときには，彼はとりとめのない時間を過している。まったく机の前に坐ろうとしない日もある。〔……〕[8)]

矢添は未来のない時間を生きている。彼の内面が不毛なものに見えるのはそのためである。

戦争末期の時代，青春の年齢だった彼にとって，未来というものは存在する筈のないものになっていた。現在も真黒に塗り潰されていた。〔……〕その時期，彼は過去の断片を拾い集めて生きていた。戦争が終って二十年経った。その間に，さまざまなことがあった。そして現在，彼はふたたび，当時と同じように眼が過去にしか向かない自分に気付く。[9)]

千枝子を道具とみなそうとして，矢添は意識して腕時計を枕もとに置く。時計は言うまでもなく，未来へ向って時を刻む。娼婦である千枝子を道具とみなすことに無理があると考える矢添が，瀬川紀子との行きずりの関係をそ

れきりで終ったものと考え，殆ど忘れかけたとき，不意に時間は止ってしまう。

アパートの部屋で，矢添克二は目を覚ました。重い目蓋を押開けながら，枕もとの腕時計を調べた。しかし，時計は止っていた。[10)]

このとき，矢添の意識のなかに未来へ向かうきざしが生れ，時間の軸が反対方向を向きはじめるのだが，それに彼が気付くのはまだ先のことだ。

〔……〕カーテンの隙間からの光は明るいが，時刻の見当が付かない。[11)]

動き出した時間の位相を知るために，矢添は電話に腕を伸ばす。彼が電話をかける場面は二度目になる。初めは千枝子と会うためで，既に引用した部分である。

〔……〕六時には戻ってきて，仕事をつづけよう，と予定を立てながら，電話のダイヤルを回しはじめた。

「いつもの女を用意しておいてくれ」

秘密の商売をしている旅館の女主人の声が戻ってくる。

「はい，千枝子さんですね。〔……〕」[12)]

電話は，矢添が外界に接するための差し当たりの窓口の役割をしている。外界で直接に他者と触れ合うことを矢添は警戒しているらしい。自己の内面を守るためには，何の媒介もなしに，いきなり他者と出合うことは，矢添にとって避けねばならぬことであるわけだ。電話は，他者との不意の遭遇を避けるための矢添の道具の一つなのである。

小説家である矢添には，当然，編集者からの電話もかかると思われるが，彼らは矢添の三つの部屋のうち「来客と話をするときにも使う」「ダイニングルーム風の部屋」[13)]に案内されるのであろうか。但し，そのことへの言及は全くない。

それどころか，電話がかかってくることを，矢添は外界の侵入のように怯えている気配さえ感じられる。

「矢添さん，矢添さんですわね。ずいぶんお顔をお見せになりませんけ

れど……」

受話器のなかの声は，たしかに聞き覚えがあるのだが，それが誰か矢添克二は思い出しそこなっている。

「千枝ちゃんが淋しがっていますよ」

それで分った。旅館の女将の声なのだ。〔……〕

「〔……〕あら，いけなかったかしら」

「あまり感心できないね」

彼は不機嫌な声を出した。〔……〕

「こういうことは，一方通行のものだよ。こちらの都合に，そちらが合せてくれる……」[14]

しかし，瀬川紀子からは矢添の都合に合わせることなく，電話がかかってくる。明らかに，電話は外界への窓口にとどまらず，矢添の内面の隙間に不意に侵入する異物となってきたのだ。

あらためて時刻をたしかめようとして受話器を戻した瞬間，電話のベルが鳴った。〔……〕

「あたしよ。分りませんか」〔……〕

「お会いしたいの」

「会いましょう」

と，彼は答える。千枝子との関係は，会えばそれで終りがくる。たとえ，また会うにしても，一回ごとに完結している。しかし，瀬川紀子を千枝子と同じに考えるわけにはいかない。紀子との関係が終った，とおもったのは錯覚だった……，と，耳にあてた受話器の中に紀子の声がひびいている今，はじめて彼はそうおもったのだ。

身構える気持になった。〔……〕[15]

矢添の過剰な身構えの姿勢については次章で記述する。「お友達と約束があるんだもの」と言う紀子に対し，矢添は「電話をかけて，約束を断ればいい」と応ずる[16]。

彼の手がドアを開き，指先が赤い電話器を指し示す。紀子は車を降りて，電話器に歩み寄ってゆく。〔……〕彼女の指がダイヤルを回しはじめた。三度しか，その指は動かなかったようにみえる。その口も動かない。約束がある，というのは紀子の嘘で，いま彼女は電話をかける素振りをしてみせているのではないか。いま，彼女の耳に当てがっている受話器からは，気象ニュースが流れ出ているのではあるまいか，と彼はおもった。[17]

紀子から電話がかかる前に，矢添がダイヤルを回し間違って，気象ニュースを聞く場面がある。

〔……〕1・1・7と回したつもりだったが，野太い男の声が聞こえてきた。テープに吹込まれた声音である。

「……発達シタ低気圧ガアリ，東支那海ニハ高気圧ガアリ，サラニ満洲ニハ弱イ高気圧ガアリマス。〔……〕」

わずかに訛(なまり)のある男の声が，気象ニュースを告げている。間違って，1・7・7の数字を回してしまったのだ。〔……〕「支那」とか「満洲」とかいう，むかし毎日のように見たり聞かされたりしていた言葉は，今はもう廃語になったという錯覚があった。[18]

受話器から聞えてくる声は，いわば過去からの声である。昔からの声である。それは消えてなくなっていたと思うほど昔のものである。従って，その直後，矢添は「あらためて時刻をたしかめよう」[19]とするが，そのとき，紀子からの電話のベルが鳴る。そこから聞えてきた声は未来からの声である。矢添の意識は一瞬，混乱する。

「あたしよ。分りませんか」

「どなたです。ちょっと分らないな……」[20]

約束を断わると言って，紀子がかけている電話から，気象ニュースが流れ出ているのではないかと疑う矢添は，まだ過去へと意識が向かい，未来からの声であるとは思ってもみない。

紀子が車に戻ってきた。

「断った……」

彼の顔に，薄笑いが浮ぶ。

「ええ，でも，こんなに明るいのに」

「明るくなければ，かまわないのか」

「……」

「はやく暗いところへ行こう」[21]

「暗いところ」とはどこか。「真黒に塗り潰されていた」矢添の過去の方向であることは明らかであろう。別れた妻の，深夜，「ブランコに乗った黒い影」[22]もそれに連なるものとみなされよう。

紀子とのあいびきが重なるにつれ，矢添の電話への過敏な反応は消えてゆく。それどころか，タブーを冒して，矢添は部屋へ紀子を入れることまでしてしまう。

ドアを開くと，暗い眼と向い合った。瀬川紀子の眼である。〔……〕

「よくこの部屋が分ったね」

「ずいぶん探したわ」

「困るな」

咎(とが)めている口調になった。

「いけなかったかしら」

「いけないね」

「あたしだから」

「女の人は誰でもいけない」

彼は紀子の軀を戸口から押返すようにした。〔……〕

「とにかく，外へ出よう」

「……」

「今日は用事があって，あまり時間がないが」

時計を見ようとしたが，腕は裸だ。腕時計は机の上にある。〔……〕

「ここで待つの」

紀子はあたりを見まわしてみせる。コンクリートの白い廊下である。

「中へ入りなさい」

彼は，苦笑してそう言った。

紀子は部屋の隅にぎごちない姿勢で立った。〔……〕[23]

紀子をしかたなくであれ，部屋へ入れたとき，矢添は無意識に腕時計を机の上に置いたままにしている。矢添にとって，時間は明らかに未来に向って動きはじめていたのだ。

紀子を乗せた車が事故を起こす結末近くには，矢添の電話への対応もこだわりのないものになっている。

その翌日の午前，矢添克二は電話のベルで眠りから覚まされた。紀子の声が，聞えてくる。[24]

それが未来からの声であることを，このときには矢添ははっきりと意識しているわけだ。

さて，矢添と外の世界との媒介として使われる道具として，矢添の乗り回す車がある。車はよく，部屋の代替の役割を持つことがあるが，矢添の場合には必ずしもそうではない。部屋に異常なほどこだわりを持つ矢添は，車については内面を投影させる様子を殆ど見せることがない。矢添が車で外出することが分かるのは，漸く六章になってからである。そのことを車へのこだわりのなさの表われと，ひとまず考えてみよう。

街へ出てコーヒーを飲んで帰ろう，と彼は考えた。

日暮の街を走り，車を地下駐車場に入れた。〔……〕[25]

車は，多分，矢添が街へ出るための「足」として，ごく自然な手段となっているのだろう。だから，矢添にとっての部屋と違い，矢添の内面にかかわりを持たず，むしろ，矢添の存在と一体化しているのだとみなされる。娼婦と別れたあと，街の画廊で初めて遭った紀子と，ビヤホールでビールを飲みながら，矢添は紀子を車で送ろうと，自分から言いだす。

〔……〕いまは女を必要としない状態にある。眼の前にいる女と別れて，

はやく机の前に戻ろう，と彼はおもった。

「送りましょうか」

そういう言い方で，店を出ようとしている。〔……〕

「車があるのだが」〔……〕

駐車場まで歩き，黒い車に乗った。[26]

そのあと，重いがけない成り行きで，紀子と旅館に這入り，「軀を重ね」[27]たあと，再び矢添はごく気軽に「送るよ」[28]という言葉を口にする。そして，紀子を家の近くでおろし，「車をスタート」させる[29]。

〔……〕もう一度振返ると，紀子は前の位置に立ったままである。顔がこちらに向いているのが分る。その眼に映っている車体が，彼自身の大きな軀になったように感じたとき，曲り角にきた。

〔……〕車は横腹をみせて左へ曲り，たちまち紀子の視界から消えていく。〔……〕

そういう車体の動きを，彼自身の動きのように感じている。犯罪現場をいそいで離れようとしている動きのようにもおもえ，また，小さな柔らかい獣を仕止めて，勇んで次の狩場へ移っていく男の動きのようにもおもえる。[30]

それほどに，矢添は車と一体化しているということであろう。車に女を乗せることには，部屋へ女を入れるような心理の葛藤は全くない。それ故，紀子を乗せた車が事故で横転する，小説のなかで重要な場面も，単なる事故として描かれ，紀子との関係の変化のための一つのきっかけとしての意味を持つにすぎない。

このように，矢添は車には過度の思い込みを持たない。とは言え，車に乗っている矢添は，外界と直接に接触しているわけではないのだ。車は矢添の存在と一体化した「使い馴れた道具」ではあるが，矢添が籠っている部屋の延長と考えられないわけではない。車は部屋という密室から，別の密室へと移動するときに使われるからである。あるときは，千枝子のいる「秘密の旅

館」[31]へ行くために，あるときは紀子を乗せて，「情事のための客だけが使う」[32]ホテルへ行くために。矢添の存在と矢添の内面が切り離せない以上，車はいわば緩衝地帯としての二面性を持たざるを得ない。部屋と車とのよく似た性格は，次のような矢添の言葉が示している。

「贈物は，部屋に這入りこんできて，いつまでもそこにいるわけだからな。その品物を見ると，くれた人を思い出す。その人間の分身のようなものに，いつまでもそこにいられるのは閉口だ」

「捨てちゃ厭よ」

「捨てるわけにもいかないからな，だから困る」〔……〕

「〔……〕それ，自動車のマスコット人形よ。バックミラーのところへぶら下げて頂戴」

「車に余計なものをくっつけるのは，きらいなんだ。部屋に置いておくよ」[33]

紀子からの贈物を部屋に置いておくと言う矢添の言葉をとおして，紀子が矢添の内面に他者として這入りこみはじめてきたことが分る場面である。ここには，車は単に道具であるから「余計なものをくっつけるのは，きらい」なのではなく，車がかつては矢添にとって，部屋と同様な意味を持っていたのではないかと推測させるだけの強さが矢添の口調に感じられる。それに，矢添は初めて遭った紀子を車に乗せはしたが，千枝子を車に乗せていないことにも注意をしておこう。千枝子と「街へ出」[34]るときも，「車は旅館の駐車場に置き放しにして」[35]，タクシーで千枝子を送っているのである。それならば，なぜ紀子を矢添は車に乗せる気になったのであろうか。その理由は説明されないが，紀子との出遭いの場面がそれを暗示する。

彼は，画廊に入った。

部屋は閑散としていて，若い女が一人，薄黄色の壁に並んでいる油絵の前に立っていた。女が眺めている絵に，彼も眼を向けた。

老人の顔の絵である。〔……〕たくさんの年輪の持つ重みはすでに消えて

いて，眼の前にある死が，その男の中に這入りこみ，顔一面に拡がっている。

絵に近寄ってみようとしたとき，若い女がまだその絵と向い合っていることに，いまさらのように気付いた。〔……〕

〔……〕眼の前の女の若さをたしかめる眼で，彼は，そのうしろ姿を眺めた。〔……〕レモン色のセーターにつつまれた円い肩に赤い糸屑が付いているのに気付いた。〔……〕

女の背に歩み寄り，指先でその糸の端をつまんだ。〔……〕

右手をその女の前に差し出してみせた。〔……〕親指と人差指のあいだから，赤い糸がぶら下っている。〔……〕

はじめて，その女の顔を見た。予想どおり二十一，二歳の女の顔なのだが，眼の縁が黒ずんでいる印象を与える。暗い眼だが，濁ってはいない。澄んだ綺麗な眼と呼んでもよいくらいだ。[36]

死を描いたような絵を見ている若い女の暗い眼と，一瞬，「赤い糸」でつながる……それが「女を必要としない状態にある」[37]矢添が，「机の上の書きかけの原稿用紙を思い浮べ」[38]つつも，女を誘い，車に乗せる理由であろうが，それはのちに詳述する。

身構える矢添

過去にしか眼が向かず，部屋に引き籠り，原稿を書くこと以外に生きる意味を持たない矢添は，外の世界とのあいだに人間関係となりそうな気配を感じると，過剰なまでの拒否の姿勢を見せる。

「なぜ，奥さんがいないの」

脇の下から仰向いて，紀子は訊ねる。〔……〕

「いないからといって，その場所が空いているわけじゃないよ」

冗談の口調で言ったのだが，真剣なひびきが混った。開いた掌を突出し

て制止している自分の姿勢が，彼の眼に浮ぶ。[39]

紀子とのあいだに，性的交渉だけでなく，人間関係と呼ぶことのできる結びつきができたことを明瞭に意識したあとでも，矢添から拒否の姿勢は消えることはない。

不意に，紀子の眼がいきいきと光った。

「お土産を買ってきてあげたわ」

反射的に拒否の姿勢になりかかる自分を抑えて，彼は黙っている。〔……〕

紀子はハンドバッグを引寄せ，俯いてその中を探りながら，

「迷惑なの」

今までと違う新しい眼で，自分と紀子とを眺めようとする気持が彼の中に起っている。しかし，このように矢継早（やつぎばや）に質問されては，掌を前へ突出して制止する姿勢になってしまう。

「迷惑だね」

と，彼は答える。[40]

矢添の過度の拒否反応は，ひとまずは書くことを妨げる煩わしいことへの拒否であり，失敗に終った結婚生活への反省から来るものであろうが，それに留まらず，「新時代」[41]への拒否反応でもあることが述べられる。

矢添が初めて遭った紀子を車で送る途中，矢添の予定していた仕事の時間を乱す結果になる言葉が紀子の口から発せられる。

〔……〕不意に女の唇が，彼の耳朶に触れるくらい近寄ってきた。内緒話の姿勢なのだが，なかなか言葉は出てこないで，生温い呼気が秘密っぽく耳朶をくすぐった。

「ね，どこか暗いところがあったら，車を停めて。おしっこがしたいの」

半ば秘密のにおいのする，半ば冗談めかした口調で言われたその言葉に，彼は戸惑い，警戒する気持になった。企んでいるのか，とおもったわけだ。度胆を抜こうとしている，揶揄している，大人を狼狽させようとし

ている……。彼は身構えながら，咄嗟に答えた。

「よしよし，それは面白い考えだ」

首をまわして，傍に坐っている瀬川紀子という女を眺めた。車の外にひろがる街の光が，薄明るく女の顔と軀を照らしている。口紅と眼の縁の墨だけの化粧をしていた彼女の顔が，異常な嗜好の持主のものであるかのように，眼に映ってきた。

彼は一層身構える。このとき，矢添克二は「新時代」にたいして身構えているのに気付いた。自分たちの年代が，「新時代」として胡散臭い警戒する眼で見られていたのは，最近のことのような気がするのだが……。[42]

紀子の言葉は，そのまえに，車に乗って「五分ほど走ったとき，不意に女は近くの国電の駅の名を口に出し，その駅まで送ってもらえばいい，と言」[43]ったことから，「企んでいる」のでも，「異常な嗜好」によるものでもなく，「切実な頼み」[44]であることが推測される筈だが，矢添は考え違いをし，過剰に身構える。矢添の目を曇らせているのは，濃密な人間関係への拒否の姿勢が元になっていることは言うまでもない。それとともに，画廊で紀子の見ていた「老人の顔というよりも，死が描かれている」[45]絵の記憶と，「赤い糸」で一瞬つながれた紀子の「暗い眼」の印象である。加えて，「どこか暗いところ」という紀子の囁きも，矢添を迷わせたのだと思われる。未来へ向わない矢添の意識は，そうした一連の紀子の言動によって，「暗いところ」である過去からの誘いを不意に他者から囁かれて，「戸惑い」「警戒する」。矢添の時間が止っているあいだに，「新時代」は未来の若い女のものとなっており，矢添は書くことによって辛うじて，過去にこだわり，過ぎ去ってゆく現在と繋がっている。矢添の現在は「過去の断片を拾い集めて，生きていた」青春の時代と同じく，荒寥とした不毛な「人影は，一つもない」[46]風景である。

この，矢添の身構える姿勢は，三年後に書かれた『暗室』の主人公である，小説家中田にもそのまま受け継がれている。

「〔……〕中田さんて，一人なんですってね。はじめて知ったわ。だからいまは，新婚旅行に出かけるみたいだわ」

マキは，すぐに違う口調で言葉をつづけ，

「と言ったら，中田さんギクッとするのでしょうね」

図星だった。反射的に身構える姿勢になっていた自分に，疎(うと)ましい気持が起った。〔……〕反射的にこういう感情に捉えられるのは，なぜだろう。中田にも，圭子という妻がいて，十年前に死んでいる。

〔……〕圭子のことだけでは，理由として薄弱におもえてきている。

「これから，答を一緒に探しに行くわけか。きみの答と，ぼくの答と……」

〔……〕発車を告げるベルの音が響きはじめた。過去の闇へ向って列車が出発するように，私にはおもえてくる。[47]

矢添は紀子という他者を受け容れてゆくにつれて，身構える姿勢にこだわりつづける自己の矛盾にいやおうなしに突き当たる。

〔……〕確実なのは，人間関係と呼ぶに足る繋りを，紀子が求めていることは確からしい。そうおもうと，反射的に彼は身構えてしまう。紀子を千枝子と同じ平面で扱おうと試みる。[48]

〔……〕彼は自分の心に訊ねてみた。もう一度，一人の女と一緒に生活してゆく決心をつけることができるか。

到底できることではない。

それどころか，一人の女に自分の部屋に入ってこられることさえ，いまは避けたい気持でいる。自分の女についての身構え方は，偏見に満ちたものなのか，あるいはその本質に触れているものなのか……。〔……〕[49]

「一回ごとに完結してしまう関係」[50]であり，「安全な筈だった」[51]千枝子が，矢添が一人で暮していると知って，

「あたし，知らなかったわ。もっと早く知っていたら，お手伝いしてあげたのに」[52]と言っただけで，矢添は又もや身構える。

「手伝いなんて，そんな……」

反射的に，矢添は拒否の姿勢になっている。[53]

車の事故のあと，漸く，矢添の身構えは和らいでくる。

「これから，お部屋に行くわ」

「はやく来たまえ」

「あら，お部屋へ行ってもいいの」

驚いたような，探るような，紀子の声が聞えてくる，矢添には，自分の返事の意味が分っている。紀子を受容れることができるかどうか，そのことについての自分の気持は曖昧で，はっきりした形を成していない。しかし，今となっては，紀子を自分の部屋に入れまいとして強張った姿勢を取ることは，もう無意味である。[54]

結局，公園で紀子を待つことになり，矢添は紀子を部屋へ入れない。

アパートの裏口から出ると，眼の前に公園の入口がある。明るい光に照らされたその公園に歩み入ってゆくのは，はじめてのことだ。[55]

「暗いところ」から吹っ切れたわけではないが，明るい公園に歩み入ってゆく矢添のまえには未来の姿が意識されはじめ，「新しい時間」[56]のなかで，矢添は外界と何らかの形で折り合ってゆかざるを得なくなっている。

一緒に，動き出す。これからの時間の中で，おのずから紀子にたいする自分の姿勢は定まってくるにちがいない。それがどういう形のものになるのか予測できないし，また，予測してみることを放棄しよう，と彼は心を定めている。[57]

〔注〕

1) 吉行淳之介『星と月は天の穴』（講談社文芸文庫），p. 22-23. これまでは初版のページをも記したが，のちに，初出，初版，講談社文庫版，講談社文芸文庫版のそれぞれについて，テクスト本文に触れる予定なので，今回からは，講談社文芸文庫版の該当箇所を注記するにとどめる。

2) 同書，p. 23.　3) 同書，p. 21.　4) 同書，p. 23.

5) 同書，p. 23-24.　6) 同書，p. 26.　7) 同書，p. 29.

8) 同書, p. 55-56.
9) 同書, p. 52-53.
10) 同書, p. 56.
11) 同書, p. 56.
12) 同書, p. 23.
13) 同書, p. 7.
14) 同書, p. 69-70.
15) 同書, p. 57-59.
16) 同書, p. 61-62.
17) 同書, p. 62-63.
18) 同書, p. 56-57.
19) 同書, p. 57.
20) 同書, p. 57.
21) 同書, p. 63-64.
22) 同書, p. 22.
23) 同書, p. 76-78.
24) 同書, p. 164.
25) 同書, p. 29.
26) 同書, p. 36-37.
27) 同書, p. 47.
28) 同書, p. 48.
29) 同書, p. 50.
30) 同書, p. 50.
31) 同書, p. 132.
32) 同書, p. 107.
33) 同書, p. 120.
34) 同書, p. 129.
35) 同書, p. 133.
36) 同書, p. 30-32.
37) 同書, p. 36.
38) 同書, p. 35.
39) 同書, p. 66.
40) 同書, p. 146-150.
41) 同書, p. 39.
42) 同書, p. 39.
43) 同書, p. 37.
44) 同書, p. 41.
45) 同書, p. 31.
46) 同書, p. 53.
47) 『暗室』(講談社文芸文庫), p. 113-114.
48) 『星と月は天の穴』, p. 60.
49) 同書, p. 112.
50) 同書, p. 60.
51) 同書, p. 138.
52) 同書, p. 138.
53) 同書, p. 139.
54) 同書, p. 166-167.
55) 同書, p. 167.
56) 同書, p. 176.
57) 同書, p. 169.